ひとりひとりの歩みを大切にして

—次第に友だちに心を向けていったナナの事例より—

星　野　和　美

はじめに

本年度4月より4歳児さくら組の担任となり、「ひとりひとりの子どもたちが、いろいろな環境とかかわりながら自分らしさを表わしていける、また、いろいろな友だちを認め合っていける学級であってほしい」と願いながら、保育にあたってきた。

4月、入園（二年課程）また進級（三年課程）当初の子どもたちは、母親と離れがたい子、遊びに向かいながらも時おり「お母さんに会いたくなった」と不安がる子、担任や新入児に少し距離感を持ち互いをよりどころとしている進級児たちなど、不安定感を示す子どもたちも少なからず見られた。しかし、いろいろな人と出会ったりかかわったりしながら、次第にそれぞれの歩みで自信をもって園生活を送っていくようになった。

ここでは、当初不安定感がかなり強かったナナの歩みを振り返り、ナナがどのような経験や人とのかかわりをしていったか、それにかかわる保育者の環境の構成や援助はふさわしいものであったか等を分析し、「いろいろな人とのかかわりの中で響き合って生活する姿」を求めていく手だてのひとつとしていきたい。

Ⅰ、実践記録

以下の記録は、平成13年度4歳児さくら組（33人）の文字記録のうち、ナナにかかわる記録を抜粋しながらまとめたもの。

※　特に活動場面について説明していないものは、「自分でみつけた遊び」の中での姿

※　子どもの名前は**仮名**

1、7期（5月～6月上旬）の生活の中で

4月12日の入園式以来、おそらく不安感を持ちながらも泣かずに園生活を送っていたナナが、5月19日㈯「帰りたい！」と大泣きをする。以来、ナナは毎朝登園時に母親と離れがたくなり、安定して遊び出すまでにかなりの時間を要するようになる。

記録1〈5月22日㈫〉

昇降口で泣き声が聞こえる。保育室で他の子どもたちの登園するのを迎え入れていた担任は、昇降口に出かけ、母親から離れがたくて泣いているナナを抱き取る。昨日と同じく、ナナは保育者に体を寄せて泣き続ける。

担任、かなりの間抱っこしていたが、泣き声をあげながらも担任の問いかけにはうなずくなど落ち着いてきたと思われたところで、担任「庭に行ってみよう」と誘い、抱っこしたまま園庭に出る。「ミナコちゃん、さがしてみようか？」「カタツムリ、いるかな」等声をかけながら。その後、抱っこからおりるが、ひとりで表情もかたい。家が近所で今まで遊んだことのあるミナコにナナを誘わせるが、ナナは「今、忙しいから」という表現で断り、一緒には遊ぼうとしない。

記録２〈5月30日(水)〉

ナナ、登園時母と離れない。担任が抱き取ると、担任にしがみついて泣く。しばらくして泣きやみ、ミナコが絵の具遊びをしている方を見ている。担任が「(ミナコちゃんのように絵の具で）遊ぶ？」ときくと、うなずく。

担任、ナナを抱っこからおろし、ミナコのそばに行くのを見届けてから、園庭の他の子どもたちの様子を見に行く。

担任がいない間にナナは再び泣き出したようだ。ユキナが（担任がすぐに見つからなかったので）泣いているナナを保健室の石川Ｔのところにつれていったと、言いに来る。

おそらく６期（４月）の生活の中でもナナは不安感を持ち泣きたい気持ちもあっただろうが、我慢をしていたのだろうと思われる。５月19日以降のナナは泣くことで自分の気持ちを出してきているのだと受けとめ、受容的な対応に努め、また１対１の気持ちのつながりを持てるように努めた。しかし、この頃のナナは、上記のように、今まで遊んだことのあるミナコにもかたい表情で答えたり（５／22）、安定して遊び出したかのように見えても担任と離れている時間が長いとまた泣き出したりする（５／30)。

２、８期（６月上旬～９月）の生活の中で

その後もナナは毎朝登園時母親と離れがたい。母親に保育室まで入ってもらい、母親とひと遊びした後、担任が「いってきますしようか」と誘って抱き取る日が続いた。(ナナの場合は抱きとると、担任に体を預けていく）　その後、ナナの様子に応じて抱っこ→おんぶ→手をつなぐなどしていく。40～50分後、担任から離れて遊びだす。

記録３〈６月５日(火)〉

この日も母親と保育室に入り、しばらく一緒に遊ぶ。

担任、他の子どもたちが登園するのを迎え入れるのが終わったところで、ナナや今ひとつ遊びこめないでいるアイに「ヒマワリに水やりに行こう。」と誘いかける。(先日親子で前庭の花壇にヒマワリの種を植えた）近くにいたコウスケ、ヤエ、アユコも水やりをしたいと言って一緒に行く。

ナナ、担任や母親と一緒にヒマワリの花壇に水やりをするうち、ジョロでの水やりが楽しくなり夢中になっていく。この日はその時点で母親に帰ってもらう。

ヒマワリの花壇が水浸しになってきたので、担任、ナナたちに他の花の花壇への水やりを誘いかける。ナナたちは応じて、他の花壇や近くのプランターの花などへの水やりを楽しむ。その後、ナナはコウスケと向かい合って排水溝の穴にジョロで水を注いで笑い合ったりする。

30分ぐらい水遣りを楽しんだ後、一緒に水やりをしていたアイと園庭（遊具のある方）へ遊びに行く。

このような日もあったが、やはりその後も登園時は母親と離れがたく、安定して遊び始めるまで40～50分かかった。一方この頃、ピンクの補助付き自転車を求めて乗る姿や、小雨のときに好んで傘を差して園庭に出て遊ぶ姿がみらるようになってきた。

また、アイとのかかわりがみられるようになってきた。

記録４〈６月11日(月)〉

アイ、互いをよりどころとしてよく一緒にいるシズカが登園してこないので不安げな表情でいる。担任、アイに「お休みの電話（連絡）があったかどうか聞きにいこう」と事務室に行こうと誘う。担任のそばにはナナがおり、アイはナナと手をつないで担任についてくる。

シズカが欠席ということが分かった後、アイとナナは２人で園庭に出る。

園庭の回旋塔で、担任も一緒に３人で遊んでいるところに、ケンがやってきて「(回旋塔を）まわしてあげる！」と言って仲間入りする。次いで、ショウタ、ユキナ、ミカ、ヨシコ、マリノらが次々にやってきていっしょに回旋塔に乗ったり回したりを楽しむ。その後、ほぼ同じメンバーでアスレチックの遊具に移り遊ぶ。

その後保育室にもどってきたとき、ナナはうれしそうな表情で自分のロッカーから粘土を取り出し、マリノと向かい合って粘土遊びを始める。

初めに一緒に遊んでいたアイは、ヨシコと一緒になっている。

記録５〈６月12日(火)〉

回旋塔で、ワタル・タカシ・ユキナ・ミカ・ジョウが遊んでいる。それを見て、ショウタ・マリノ・ユタカが次々に仲間に加わり、一緒に「１、２、３、…９、10！」と声を合わせてまわしたりする。たくさんの友だちと共にいることを楽しんでいる様子である。

担任についてきていたナナ・コウスケ、回旋塔での遊びをしっかり見ている。担任、昨日ナナはユキナらと回旋塔での遊びを楽しんでいたことを思い出し、一緒に遊ぼうかと声をかけるが、入ろうとはしない。

記録６〈6月14日㈭〉

記録６－①

シズカ「アイちゃんとナナちゃんがいない。」と、心もとなそうに担任に言ってくる。

担任、シズカと一緒に２人をさがす。

２人は、さくら組から最も遠い３歳児いちご組の方へ行っていた。

アイ「たんけん、してたんだよ。」ナナも肯く。

シズカ、アイにおこる。(一緒にいたかった気持らしい)

その後、３人とも連れ立って遊戯室に行き、巧技台のすべり台で遊び出す。

記録６－②

担任、他の子どもたちの様子を見に行く。

しばらく後、ナナ、担任のところに泣き顔でやってくる。

ナナ「たたいた（誰かが)」

担任が聞いても誰かわからないようす。

担任「痛かったね。びっくりしたね。」となぐさめていく。

この後、(アイとなかよしの）シズカと一緒に遊ぶ姿もみられ、６月20日㈬には、９：45、担任とつないでいた手を自分からきりをつけるようにはなし、笑顔でシズカのところへ行くという姿も見られた。(教育実習生も２人を見守っていた。)

一方、毎朝登園時に母親と離れがたい様子は続いており、６月28日まで登園後母親とひと遊びしてから担任が抱き取るという形であった。しかし、しばらく担任と一緒にいた後のナナの遊びぶりから、母親と相談し、７月２日以降は登園した時点で母親と離れるようにした。７月18日には、担任の（言葉だけでの）促しで母親と離れることができたりしたが、登園時の様子は一進一退というところであった。

夏休みを終え、９月になっても登園時のひとときは母親と離れがたい様子であり、安定して遊び出すまで担任はナナに付き添っていた。しかし、遊び出すと自分の動きをしていき、７月までも園庭での遊びに気持ちを向けていくことが多かったが、９月にはさらにバッタ取りやヒマワリの種取りなど、園庭の季節のものに目を向けての遊びに気持ちを向けているようであった。

また、この頃、次のように、いろいろな友だちとふれ合ったり受け入れたりしながら遊ぶ姿が見られた。

記録７

記録７－ア　ミナコと２人で

７月18日㈭　ミナコと赤土山で思い切り泥んこ遊び。

9月1日(土)　ミナコとバッタ取り。

9月7日(金)　ミナコと前庭でアサガオの色水作り

記録7ーイ　アイと2人で

9月18日(火)　アイとアサガオの色水作り。

9月26日(水)　アイと前庭の花壇のオジギソウを触って遊ぶ。

9月27日(木)　アイとアサガオの色水作り。アンリも加わる。

記録7ーウ　他の友だちもまじえて

7月16日(月)　ミナコ・ヤエ・ショウタと家型の固定遊具「ウッドシャトー」で土でごちそう作り。

9月5日(水)　ナナ・ミナコ・ユウヘイ、3人でアスレチックの固定遊具の上で「マリオごっこ」　ユウヘイ「ぼく、マリオ。2人はピーチ姫」

9月13日(木)　3歳児いちご組のセイコと前庭でマワリの種取り。

9月14日(金)　ミナコ・コウスケと前庭でアサガオの色水作り。(実習生の見守りもあり)
アスレチックの固定遊具の上で、おうちごっこ。マリノ〈お母さん〉、アキミ〈おねえさん〉、ミナコ〈7歳の子ども〉、ナナ・ユキナ〈6歳の子ども〉

3、9期（10月上旬～1月）の生活から

記録ー8　〈10月9日(月)〉

ユキナ・ヨシコ・アイがウッドシャトーでごちそう作りをしている。途中からアユコも加わる。

ミナコ・アイ「入れて」とやってくる。

ユキナ「場所がない」「いつも入れてって言うんだから」等、渋っている。

担任は、ユキナの話を聞いたり、ミナコの気持ちを受けとめたりしながら、とりあえずユキナの「場所がない」を解消してあげようと、ごちそう作りの台をさがしに行く。

担任が戻ってくると、その間にミナコとナナはウッドシャトーの「2階」に場所をもらったと言う。

ミナコ「決めた。2人、おかあさん。ユキナちゃん、いい？」ユキナ、小さな声で「OK」

記録ー9　〈10月12日(金)〉

ミナコが担任に「ナナちゃんが一緒に遊ばないって言う」と訴えてくる。

ナナ・アイ・ユキナが3人で遊んでいるところへ、担任とミナコで行き、ミナコの遊びたい気持を伝える。

ナナ「(遊ばないわけは特別には) ない。今、3人で遊ぶから。」

ユキナ「遊びたいならいいよ。」

アイ「ユキナちゃんの言うとおり（でいいよ）」
ナナ「（アイちゃんと）同じ。砂で遊ぶならいいよ」
４人でままごと道具をたくさん持ち、赤土山の方へ行く。

このように周囲の人たちの中でミナコと一緒ながら「入れて」と自分の気持ちを表わしり、自分の揺れ動く気持ちを「３人で遊ぶから（遊ばない）」「砂で遊ぶならいい」等、８期までよりよりはっきり自分の気持ちを表していく姿が見られるようになった。

このような姿が見られつつあった９期の中ごろ、幼稚園のみんなで「秋祭りをしよう」という活動を行った。

さくら組でも「秋祭り」にかかわって自分なりにやりたいことをイメージして取り組んでいくことを支え、保育者の話や友だちの活動・年長児の活動などに触発されて、輪飾りをつくろうとしたり、「おだんごやさん」「たいやきやさん」「武器やさん」「おばけやしき」「あてくじ」などのお店を作ろうとする動きが見られた。

記録10　〈11月１日(木)〉

幼稚園の全学級で集まり、「11月13日に秋祭りをしよう」という話を聞く。

学級でも「秋祭りでどんなことをしたいか」についてみんなで考えを言い合う場を持つ。ナナもアイも集まった場では特にやりたいこと等は言わなかったが、みんながそれぞれに動き出すのを見ているうち、自分たちも何か思いついたようであったが、取り組みかねている様子であった。

担任「ナナちゃんとアイちゃん、何かしたい？」

アイ「やきいも（やきいもやさん）、したいんだけれど…」ナナも同意の様子。

担任、どんなふうにしたいのか聞いていき、２人のほしがる机（お店の場）と折り紙（やきいもの材料）を出していく。

アイ、折り紙をひねるようにして「やきいも」を次々につくっていく。ナナも一緒にしていく。

他の子どもたちの「お店」の場と同様に、アイとナナの「やきいもやさん」の場もみんなで大事にとっておくようにした。

11月２日(金)以降も、アイとナナは自分たちの「やきいもやさん」の場を居場所として遊んでいることが多く、その場にいると安心という感じであった。11月13日（火）の「秋祭り」以降もその意識は続いた。

記録ー11

記録11ー①〈11月14日(水)〉

ナナとミナコ、テラスの大きなテーブルの場で「飾りやさん」をすると言う。(担任がいろいろな材料を材料棚に置いていたもののうち、赤・黄・青の小さな布片を見つけ、それで思いついた「かざり」を売るというイメージのお店)

ナナとミナコ、意欲的に布片で「かざり」を作ったりそれを並べたり、また、近くのガラス戸に布片をつないで飾りつけを一気にしたりという姿がみられた。

記録11―②〈11月15日㈭〉

アイははじめの保育室内の「やきいもやさん」の場をよりどころとしており、新たにその場を「あてくじ」のお店に変えようとする。ナナは日によって、ミナコとの「飾りやさん」に行ったり、アイとの「やきいもやさん」「あてくじやさん」の場にいたりするが、ナナ・アイ・ミナコ３人のお店になることはなかった。

この時期の「やきいもやさん」も「かざりやさん」も、一緒に遊ぶ友達は以前から親しみをもってかかわってきたアイやミナコであるが、学級の毎日の生活の中で自分の活動の場が確保されているということ、その頃の「秋祭り」の活動の中で自分たちの活動が周囲の友達の中で認められていること、そのように担任が支えてきたことで、より安心・安定して園生活を送ったのではないだろうかと思う。

この後の11月20日㈫、登園時にナナが「金メダルつくった」と紙で作った学級全員分の「金メダル」を家から持ってくる。保護者からも次のような手紙が届いた。

手紙①（保護者からのもの）

いつもお世話になっております。朝の引っぱりあいはなくなったものの、先生がナナに手をやってくださると離れられるようになったみたいですね。まだ玄関で離れられないみたいですが、そういう日は近いのでしょうか？

（中略）

今日（19日）はさくら組全員に『金メダル』を４時間くらいかけて１人で作りあげました。以前「男の子、きらい」と言っていましたが、「明日みんなきてくれるかな」と言いながら作っていましたので、さくら組のみんなが好きで仲間意識が出てきたのかなとうれしく思いましたが、どうでしょうか？　ちょっともつれやすいメダルで先生にも手をかけさせると思いますが、よろしくお願いします。

〈追伸〉作り上げた時、何か自信に満ちていました。寝る時「私はさくら組だから、さくら組のみんなに作ったの」と言いました。親バカはよくわかっていますが、先生からもほめてやってくださいますか？

担任はナナにしっかりと「すごいね。みんな喜ぶよ」とほめていくとともに、この日学級のみんなで集まった場で、この金メダルのことを「みんなのことを思いながら」「いっぱい時間をかけて作ったんだよ」と紹介し、ナナがひとりひとりに手渡す場面を設ける。

その様子を、保護者に次のような手紙で知らせた。

手紙②（保護者へのもの）

おたより、ありがとうございました。ナナちゃんが、全員のために「金メダル」を作られたこと、すごいことだと思います。本当にひとつずつていねいに作られていてびっくりしました。みんなの集まったところで「ナナちゃんがみんなのことを思いながら、いっぱい時間をかけてつくったんだよ」と紹介すると、「すごい…」「ナナちゃん、ありがとう」等、子どもたちの中から自然に声が出ました。（すでに何人かには渡しておられましたが）残りの分をひとりずつにナナちゃんから手渡ししてもらいましたが、その間、みんなはとても大事なものをプレゼントしてもらうという感じで静かでした。

おかあさんのおたよりにあるように、この全員分の「金メダル」を作られたことで、何か乗り越えられたものがあるように思います。

朝の、形の上での別れがたさは、ナナちゃんにとってひとつの「儀式」のようなものであるととらえて下さり、今しばらくは保育室まであがっていただきたいと思います。（ほんのひとときで、元気いっぱいに遊び出されます。）

この後、アイ・シズカとともにアユコ・マリノ・アンリ・ヤエ・アキミなどたくさんの友だちとともに遊動円木に乗って楽しんで遊ぶ姿が見られたり（12月4日）、再び「みんなへ」と学級の全員分のプレゼント（折り紙で作った手裏剣・「めいろ」など）を作ってきたり（12月5日）する姿が見られた。

また、ナナが「みんなへ」と製作物を作ってきたことは、他の子の気持ちにも響いていたようで、12月10日(月)、アユコ・マリノ・アキミが「自分で見つけた遊び」の中で、学級みんなのために紙で「バッヂ」をつくり、アユコが「早くお片づけしてみんなにあげたい」と言ったりもしている。

12月15日(土)、ナナは登園時に（保護者に付き添われずに）ひとりで保育室に入ってくることができ、以降続いている。

以後、10期の生活の中でも、「アイと２人で、他の子どもたちから少し離れたところに位置していく」など、もうひとつ周囲の人の中で自由な気持ちや自信をもちかねている面も見られ、興味を持ってがんばりつつある補助なし自転車乗りを励ましたり、アイと２人で遊戯室の大積み木を使って繰り返し大きな「おうち」を作るのを支えるなどしていった。また、２人も含めて、学級の中でいろいろな友だちを互いに大事な存在として認め合っていけるように願い、そのひとつの場として、ひとりずつの話題をクイズ形式にした「友だちクイズ」を2月5日(火)～3月12日(火)まで行ったりした。

Ⅲ、ナナの歩みと学級全般の様相、保育者の環境の構成・援助について

1、7期の生活の中で

7期の頃のナナは不安感が強く、家が近所で今まで遊んだことのあるミナコにも、記録1のように、かたい表情で遊ぶのを断ったり、記録2のように少し一緒に遊び出してみてはやはり泣き出すなどの姿がみられた。

この頃、ナナのように母親と離れがたいシズカ、時おり「お母さんに会いたくなった」と不安がるアイ、表情のかたいコウスケ、年長児の姉をよりどころとしているユキト、担任や新入児に少し距離感を持っているように思われる進級児のテツト・シンジ・トシヒコなど、直接的な援助を必要とする子どもたちがかなりいた。担任は、これら不安定な気持ちを表している子どもたちに受容的な対応をしていくよう努めると共に、一見よく遊んでいると思われる子どもたちとも機会をとらえて1対1の気持ちのつながりを持っていこうとしていた。

2、8期の生活の中で

ナナはやはり母親と離れがたく、朝は担任と共にかなりの時間を過ごすものの、記録3のようにきっかけがあれば、花壇への水遣りを友だちと共に楽しんだり、ピンクの補助つき自転車を求めて乗る・小雨の中傘をさして園庭に出て遊ぶ・ヒマワリの種取りをするなど、自分なりの楽しい遊びを持ちつつあった。また、家が近所のミナコ以外に、記録3・記録4・記録6－①のように、同様にやや不安な気持ちを持っているアイ・シズカらとのかかわりがみられるようになってきた。

しかし、一方、記録5のように、前日に友だちと楽しんだ回旋塔に前日と同様な友だちがいても、この日は仲間に加わろうとはせずじっと見ているだけであったり、記録6－②のように、周囲の状況がよくわからないまま不安で泣いてしまうようなこともあった。

6期には、（入園・進級前から知り合っている一部の子どもたちを除き）それぞれの子どもたちがひとりずつの意識や遊びであったが、7期には少しずつ周囲の友だちとふれあい、一緒に遊んでいく姿が出始めた。この8期には進級児と新入児が入り混じって遊ぶ姿、興味ある遊びにはより多くの子どもたちが寄り集まる姿が見られ始めた。友達とかかわる姿のほとんどに、友だちと一緒に遊べることの喜びが感じられ、さらに友だちと自由にかかわる雰囲気を大切にしていこうとしていた。また、6・7期の生活を通じて、園のいろいろな環境に親しみ、気に入った遊びに取り組みつつあったが、8期には、さらに「この遊び、楽しい」「こんな遊び、みつけたよ」と、ひとりひとりの思いや願い・イメージを意識的にしていったり、「○ちゃんとこの遊びして楽しかった」「○ちゃんの遊び、楽しそう」と周囲の友だちの存在をより意識していく生活になるよう努力していった。

3、9期の生活の中で

この頃のナナは、記録8・記録9のように、揺れ動く気持ちであったり周囲の友だちも十分に受け入れてくれなかったりもするが、(これまでの期に比べ) より自信を持って自分の気持ちを表していく。

特に、記録10・記録11のように、「秋祭り」にかかわる活動の中では、自分の活動の場が確保されていることや自分たちの活動が周囲の友だちに認められていること、そのように担任が支えてきたことで、より安心・安定して園生活を送ったように思う。秋祭りの活動を経験した後の11月20日に、ナナが学級のみんなに「金メダル」を作ってきたのは、そういう生活を通じて周囲の友達への思いがより強くまた広がってきたからと思われる。

9期、「なかよし」の意識がより強くなったり友だちとのかかわりが広がったりする一方、なかよしの友だちと一緒にいることにこだわる姿も見受けられた。機会をとらえて、いろいろな友だちに接していこうとする気持ちを促していくように努めた。またいろいろな場面で友だちと対等にかかわっていけるような援助に努めた。一方、比較的その日そのときの遊びが多かったこれまでの期に比べ、自分の願いやイメージをもって遊ぶ姿がふえてきており、11月上・中旬の「秋祭り」の活動の中でもそのような姿や意識を支えていった。

Ⅳ、「いろいろな人とかかわりながら響き合って生活する」という視点からおよび今後の課題

7期のナナは、記録1のように、不安な気持ちがいっぱいで、それまで家が近所で遊んだことのあるミナコの誘いさえ受け入れることができないという姿を見せる。

しかし、次第に園生活に安定していき、8期の記録3のように、ひまわりの花壇への水遣りをきっかけに「コウスケと向かい合って排水溝の穴にジョロで水を注いで笑いあう」、記録6－①のアイとの「たんけん」など、かすかな短時間のかかわりであるが、周囲の友だちを受け入れ響き合っていく姿を見せ始める。

そして、9期の記録8や記録9のように、「一緒に遊びたい」という子どもたちと「自分たちだけで遊びたい」という子どもたちで気持ちのすれ違いも経験する。ナナ自身も記録8のように仲間に入りたいのに受け入れてもらえない立場や、記録9のように今気持ちが向かっている友だちとだけ一緒にいたいという気持ちを経験していく。

このような経験も繰り返し、その中でさまざまな感情体験もしながら、また一方、「秋祭り」の活動の中で自分たちの活動が周囲の友達に認められているという安定感・存在感を感じながら、手紙①（保護者からのもの）にあるように「私はさくら組だから、(金メダルを) さ

くら組のみんなに作ったの」というような、学級の友だちへの思いを持っていったように思う。

保育者としての今後の課題として、不安定な様子のときの援助や配慮には目が向きやすいが、一見安定して遊び出したかのように見えて安定しきれないでいる気持ちの理解や支え、友達同士での気持ちのすれ違いにあたってのそれぞれの子どもの気持ちの理解や支えを、よりていねいに努力していかなければならないと思っている。また、ここでは考察し切れなかった担任や母親以外の大人（他の保育者やなかよしの友だちの保護者など）により支えられている部分についてさらに研修していきたい。